

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	2017 Keystone Symposia Conference J7:Inflammation Driven Cancer:Mechanisms to Therapyに参加して
別タイトル	2017 Keystone Symposia Conference J7: Inflammation Driven Cancer: Mechanisms to Therapy
作成者（著者）	仁科, 隆史
公開者	東邦大学医学会
発行日	2017.6
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 64(2). p.146 147.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.64 02 146
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD54280441

2017 Keystone Symposia Conference J7: Inflammation-Driven Cancer: Mechanisms to Therapy に参加して

仁科 隆史

東邦大学医学部生化学講座病態生化学分野



私は、2017年2月5日から10日まで、米国コロラド州キーストンで開催された2017 Keystone Symposia Conference J7: Inflammation-Driven Cancer: Mechanisms to

Therapy に同講座の研究者である進藤綾大くんとともに参加し、研究発表をおこなった。

Keystone Symposia は医学生物学、生命科学の発展を目的に、年間を通じて世界中で様々なテーマの会議が開催されている。そして、各会議にはそれぞれの分野の世界のトップクラスの研究者が集い、口頭発表ではいわゆる三大誌に掲載されそうなデータの発表が行われている。私は当初、本会議の参加は演題募集の期間を過ぎていたこともあり諦めていた。しかしながら、私の希望を知っていた中野裕康



左上 街角にあった氷の彫刻，右上 リゾートエリア間は無料のバスで移動できる

左下 ホテル近くにあったゲレンデ，右下 海外学会での楽しみのひとつ



学会会場外にて 会期中気温は氷点下だったため、上下かなり着込んで臨んだ

教授の心遣いから、教授が計画代表として入られている新学術領域支援班より若手研究者のサポートとして出張旅費の支援を受けられることになった。そこで、学会ホームページを調べてみたところ口頭発表に選ばれる対象にはならないが、ポスター発表なら受け入れる余地があるとのことで応募した。その結果、無事に採択され、私たちは参加することができた。

会議が開催されたキーストンは、標高約2800 mのスキーリゾート地であり、学会期間中も会議場の周辺はゲレンデを楽しむ人たちが溢れていた。運動音痴な私は、幸いウィンタースポーツも不得意であったため、学会を抜け出して遊びに行くという誘惑が湧き起こることもなく会議に集中することができた。

今回参加した会議は、Microbiome in Health and Disease J8と合同で開催され、がん関連の研究者、ならびに細菌叢関連の研究者、併せて約500名が参加していた。近年、がんの進展や病態の変化は、腸内細菌叢の変化の影響を受けることが報告されており、両分野のトップレベルの会議を合同で開催することは、お互いの分野の相互理解とその発展を目指したものであったと考えられる。

そして私は、大腸癌の増悪に関わるとされる Interleukin (IL)-11に着目した研究を進めており、本会議では私たちが新たに樹立した IL-11 レポーターマウスを用いた、慢性炎症から大腸癌が形成される過程における IL-11 産生機構の解析結果を報告した。その結果、多くの海外の研究者の方々に興味をもってもらい、実際共同研究を始めるきっかけを

作ることができた。個人的にはポスター発表を聞いてくれた多くの研究者に、「この発表はいつ口頭発表があったのですか？」と聞かれたことがお世辞でも嬉しかった。

一方、本ミーティングではトピックスとして、腸炎などに対して治療効果が見られている糞便移植や病態により変化する常在菌叢の変化が生体にどのような影響を与えているか、マウスモデルから臨床検体を用いた解析まで幅広い報告があった。また現在のがん治療の大きなトピックスである PD-1 (Programmed cell death 1)/PD-L1 に対する抗体の作用機序と抗体治療不応性機構解明に着目した研究報告も多くされていた。

加えて近年、炎症反応がどのようにがんの進展に寄与しているのか注目を集めているが、本会議においてはマクロファージ、肥満細胞、ストローマ細胞、血小板や補体系が、がんモデルマウスを用いた研究から、がんの進展に寄与していることが報告されていた。

全体を通して、私は本会議に参加した結果、自分の発表中に多くの助言やコメントをいただけただけでなく、世界中の研究者の口頭発表やポスター発表を聞くなかで、何が重要な課題なのか、また演者から最新の技術や実験手技のコツなども直接聞くことができ、研究をさらに発展させる上で、とても有益な出張となった。

今回の学会参加が有意義なものになったのも、日頃より惜しみなくお力添えくださる生化学講座の中野教授をはじめ、講座内外の多くの先生方のおかげである。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

DOI: 10.14994/tohoigaku.64-02-146